



# 道東の名峰を山スキーで登って滑る

日本百名山の一つでもある名峰・斜里岳に、雪のある時期にスキーで登って滑りたい、と企画したこの山行。札幌から遠くてなかなか行けない道東だけに、斜里岳だけではもったいないと、海別岳も加え3月29日から31日まで2泊3日の「道東山スキー遠征」として実施した。

\*

3月29日は荒れ模様の天気となったので山は取りやめ、札幌組4人は朝7時に出発。途中で旭川の長谷川さんと合流して14時過ぎに斜里に着き、北のアルプ美術館へ。山の文芸誌『アルプ』に携わった畦地梅太郎、大谷一良らの版画や、尾崎喜八らの自筆原稿、再現された串田孫一の書斎などを見学。初めて訪れたメンバーも感銘を受けたようだ。宿泊先のクリオネキャンプ場のレンタルハウスは快適で、隣接する斜里温泉にも入れてリーズナブル。その夜は、手巻き寿司パーティで、翌日からの山行へ向けて英気を養った。

## ■海別岳 (1419㍎) 3月30日

この日はまだ南風が強いようなので、当初この日に予定していた斜里岳は、好天予報が出ている翌31日にスライドし、この日は海別岳を目指すことにする。キャンプ場を出ると、海別岳や斜里岳に加えて、遠音別岳と知西別岳や、羅臼岳から硫黄山への稜線まで、知床半島の山がはっきり見えて気分が盛り上がる。

観光名所「天に続く道」先の除雪終点から7時過ぎ



に出発。すぐ植林地に入り、スノーモービルのトラックが縦横に走る広い北西尾根を登っていく。かなりの密林だが、巨木もちらほら。傾斜が緩いのでなかなか標高が上がらないが、2時間以上かけて標高700㍎を越えると、ほぼ森林限界となる。上に山頂稜線(写真①)、振り返ればオホーツク海と流氷が見える。右手には小海別岳が大きい。ほとんど西風に乗って後からやって来た雲に覆われて、何も見えなくなってしまう。

雪も降ってくるなか、ハイマツや灌木が頭を出した尾根を黙々と登り、今日はもうこのままの天気かと(2面へ続く)

### 【目次】

- 山行報告 ..... 1 - 12
- 2024年内の主な山行予定 ..... 13
- 礼文島から氷壁登攀、ヒマラヤの未踏峰へ ... 14 - 15
- 北海道支部総会案内 ..... 16
- 東北・北海道地区集会案内 ..... 16
- 花パト募集・研修会案内 ..... 17
- 書籍紹介 ..... 18



(1面の続き) 諦めかけた時、標高1200m付近でいきなり雲が晴れ、海や山頂が再び姿を現す。山頂から滑る十二線沢も眼下に見え、モチベーションが上がる。

それでも風は強いままで、ガスったり晴れたり、目まぐるしく変わる天気の下、硬くなった雪面にシールやスキーアイゼンを利かせて12時頃、頂上稜線の一角に達する。そこからアップダウンのある稜線をたどること20分、先に高いところがなくなると山頂だ。強風に乗って流れてくる雲で、眺望はほとんど効かない。

シールを剥がして、十二線沢へ。さあ、お楽しみ of 滑走といきたいところだが、山頂直下はガリガリの急斜面で、ハイマツも出ていて、まともに滑れない。また降り始めた雪が吹き上げてくるなか、白い雪面をさがして左へ左へ。スキーがバタつく。標高差100mほど下ったところから右へ折り返し、沢底までたどり着くと、そこには、昨日から今日にかけて降った雪がたまっていた。

海に向かって滑っていく(写真2)と傾斜も緩み、大きく開けた谷を自由に滑降する(写真3)。雲も晴れてきて、青空がのぞく。700m付近で崖状の段差を下り、屈曲点から右の尾根の末端を巻いて標高を落とさずトラバース。そこで新しいクマの足跡を見つける。

ほぼ登り返しなしで登りのトレースと合流し、15時半に登り口まで下ると、山頂がはっきり見え(写真4)、明日への期待が高まったが... キャンプ場に帰り着いてはどなく、雨が降り出した。

その夜は、斜里で仕入れた魚介を使ったブイヤベースや鹿肉ローストを食し、晴天祈願の宴となった。

### ■斜里岳(1547m) 3月31日

最終日の朝、雨(山は雪)は止んだものの斜里岳の山頂は雲の中。6時過ぎに根北峠を出て、緩く広い東尾根を登って行く。海別岳とは違い、ほどよい疎林だ。

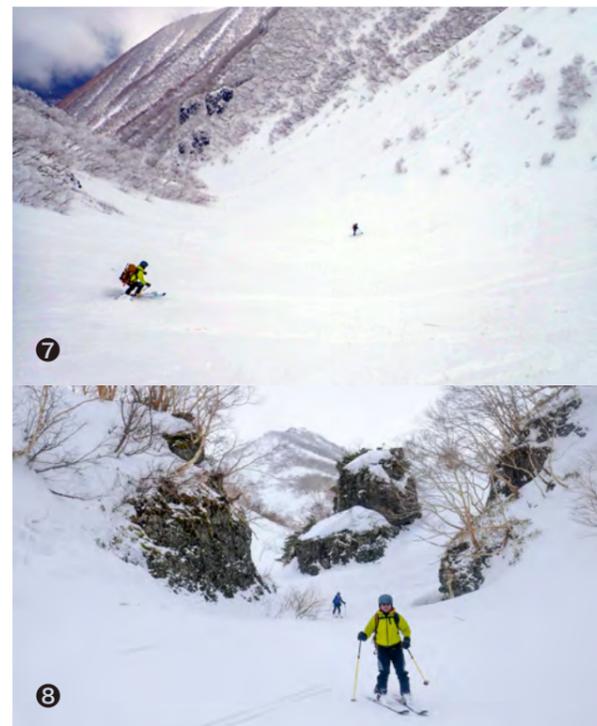
7時45分、樹林帯を抜けて左手のパンケニワナイ川に入る標高750m付近で、昨日の疲れや体調不良から2名が離脱。3人で山頂を目指すことになった。山頂方向はガスに包まれて全く見えない。

あまり下らず登らず、ほぼ水平トラバースで谷に入っていくと、そこは完全にガスの中。時折風が吹いても吹き払われない。ダケカンバの大木が多い。一昨日、斜里の街中で出会った二人組テレマーカーが先行する。

堅雪の上に新雪が薄く積もった傾斜の緩い沢を登り、真ん中に大岩のある950mの二股は右へ(写真5)。1050m付近の右岸には氷瀑ができています。ガスがさらに濃くなり、ほとんどホワイトアウト状態。進むべき沢の上流がどちらかも、よくよく目を凝らさないと分からない。

1200m付近の急傾斜のところ(たぶん下は30mの大滝)も、どこを登ればいいのか皆目見当もつかないが、右は雪面が氷化しているようなので、より斜度はあるが吹き溜まって雪が柔らかい左側を、ジグを切って登る。天候回復の兆しはないが、この上で傾斜は緩まり、沢が開けてガスも薄くなってきたので、とりあえず主稜線の1376mの科尔を目指す。1250mの二股は右股へ。

11時頃、先行者2人がいる科尔に上がると、さすが



に風は強いが、少し待つと多少視界が効くようになったので、山頂を目指すことにする。1480mピークを左から巻くように南西斜面をトラバースして、夏道のある山頂直下の科尔、馬の背(1430m)へ(写真6)。しかし、すぐにまたガスが濃くなって視界数mの状態となり、方向はもろん現地の斜度も分からない。それほど急斜面ではないはずだが、積雪で斜度が変わっているところもある。何も見えないので平衡感覚が保てず、スキーアイゼンのない私はエッジを立てずに滑落してしまう。

斜面の緩そうなところを斜めに登って、何とか馬の背まで上がる。ここから山頂までは標高差100mほど。アイゼンを付けて30分ほどで登れるだろうが、依然天候は回復せず、残り時間も少ないので撤退を決め、シートラゲンしてアイゼンで1376m科尔まで戻る。

ここからのスキー滑走は、はじめは灌木が出て、雪面も硬く、視界も効かず大変だったが、1200m付近の“大滝”を、氷化した左岸側から降ると(写真7)、そこからは傾斜が緩まり、ガスも晴れて、沢を快適に滑って行けた。950mの大岩の門を通り抜けたところ(写真8)など変化にも富んでおり、このパンケニワナイ川は、なかなかいい滑走ルートだと実感できた。登りのルートより手前で左岸のトラバースに入り、より上のラインを通過して、シールを付けずに東尾根に戻り、根北峠へと滑り降りた時には14時半を回っていた。(田中健)

○参加者 CL 田中健、SL 黒川伸一、今芳文、長谷川恵美子、高尾美緒

### アイスクライミング体験・入門 恵庭溪谷

1月28日【アイスクライミング】 齋藤幸市

アイスクライミングを会員に体験してもらった入門山行を恵庭溪谷で実施しました。部外者も含めた総勢7人の参加者は、朝8時にモイチャン川沿いの林道入口に集まり、歩くこと20分で俗称シャンデリアに到着しました。

登攀経験や大学時代に山岳系の部活経験のある参加者もいるなかで、やはり一番熱心だったのが、アイスクライミングは初心者 of 清瀬博昭君。真剣に話を聞きながら、アックスを手に氷に立ち向かっていました。あまりの彼の情熱に、昼過ぎにはだいたい氷が溶けかかってきました〜というのは冗談で、実はシャンデリアは日当たり良好なので、昼からはとても暖かいのです。「アイスクライミング=寒い」というイメージがちょっと当てはまらない、「ヒトにやさしい」フィールドです。

登山技術は多岐にわたり、本来、すべてを一定水準で出来ることが理想なので、機会があれば、多くの方にいろいろな体験・入門に参加していただければと思います。



#### 【清瀬博昭さんの感想】

私にとっては初めてのアイスクライミングでした。この山行に参加を希望したのは、昨年、冬の上ホロにアルパインルートから山頂に立てたことが嬉しく、アイスクライミングの技術を身につけたいと思ったからです。

氷柱はあまり高くはなく、怖がらずに登ることができましたが、信用できるのは自分の体や道具ではなく、仲間のビレイだけでした。ピックの刺さり具合、アイゼンの前爪のかけ具合など、何が正解かよく分からないなかでも、何とか登ることができました。

昼頃になると氷も溶け初め、グズグズになりましたが、氷の変化とともに登り方を変えることも学べました。天気もよく、充実した練習となりました。

○参加者 CL 齋藤幸市、SL 後藤幸治、名和田豊、小玉孝之、吉住琢二、清瀬博昭(会員外) 矢部寛

### 迷沢山 送電線ルート

1月28日【山スキー】

山内忠

前日の風雪で平和の滝は除雪が入っておらず、今日は登らず撤退かと思ったが、何とか揃って出発する。すぐに若い単独行者が追いついてきて、以後は一緒に登った。

ラッセルは靴が沈む位で、まだ雪が柔らかい。送電線下のオープン斜面は惚れ惚れするほど美しく(写真①)、青空に樹氷が綺麗だった。

迷沢山頂直下を滑り、送電線下へ。誰も滑っていない斜面を滑る気持ち良さ(写真②)、近間でお得な山だった。



○参加者 L 山内忠、田中健、荒田孝司、三浦一恵、小川茉莉 (会員外) 荒田夫人

### 白井岳 朝里岳沢ルート

2月4日【山スキー】

山内忠

風で一日順延、その日はネオパラで望外の雪に当たり、期待が高まる。垣間見える青空に気を良くし、先行する知人のトレースを追う。早くラッセルを代わりたいが、なかなか追いつけずにいるところにやってきたのが、また知人だった。

風の稜線(写真③)では珍しく他のグループを見かけず、知人二人のお蔭で楽ちん山頂人となる。標識は雪に埋って周りの山々はぼやけ、そそくさと支度してヤッホー斜面にスキーを滑らせた。あっちこっちから歓喜の声が聞こえ、最後に誰からともなく「やっぱり白井は裏切ら



ないね〜」に一同納得のお山となりました。

○参加者 L 山内忠、荒田孝司、長谷川恵美子、山崎裕侍、佐々木朋代、三浦一恵、小川茉莉、清瀬博昭、横山諒平 (4月入会)

### ニセコ・スキー合宿

2月5日 - 8日【山スキー】 田中健

日本山岳会アルパイン・スキークラブ(ASC)のメンバーを迎え、五色温泉別館(写真④)を借り切って、近年恒例の3泊4日の「ニセコ・スキー合宿」を実施。総勢17名が存分に山スキーに興じるとともに、温泉と酒食をともにしながら交流を深めました。

ホスト役の一鐵さん、シェフの銭亀さん他による至れり尽くせりの“おもてなし”もあって、本州からのASCメンバーにも満足してもらえたようです。

天候にも比較的恵まれ、60代の“相対的な若手メンバー”は、2日目にはイワオヌプリ(写真⑤)、3日目にはシャクナゲ岳(写真⑥)とチセヌプリ(写真⑦)の山頂まで登って、滑りを楽しむことができました。

○参加者 (北海道支部) CL 藤野和男、SL 鈴木貞信、SL 常本良一、一鐵巖、銭亀三佐子、橋本一郎、藤木俊三、田中健、市毛三朗、鈴木幹 (会員外) 市毛夫人 (ASC) L 齊藤俊二、森田直人、高尾文雄、中山茂樹、佐藤真二、河野直子



### 多峰古峰山

2月14日【スノーシュー】 藤木俊三

多峰古峰山(たっぷこっつやま・661m)は恵庭岳、風不死岳などともに支笏カルデラの外輪山を構成する一峰で、高さこそ1000mに満たないものの、山頂の東には樹木がないポイントがあり、大変眺めが良い山です。夏道はなく、登られるのは主に積雪期です。今回は支笏湖岸側の北面の尾根をスノーシューで登りました。

登山口は苔の洞門の入口から国道を美笛峠方向へ1km強のところ。車は林道ゲート前に2台、美笛峠方向に進んだ場所にもう1台を駐めました。

しばらく植林地の中の林道を進み、右の尾根の裾へ。浅い沢状のところを登って尾根のコルでひと休み。こままで50分。雪は少なく、ネマガリタケが顔を出しています。



ここから尾根を登っていくと右手の木々の間から支笏湖や恵庭岳が見え始めます。両側に岩があるところを過ぎると、細いダケカンバが密生した平坦地で、「モクンタツコップ」の矢印看板があるあたりから最後の急登。樹林帯の急斜面を登ること約20分、出発からおよそ2時間で、山名看板が木に付けられた頂上に着きました。

ここは湖側に木が生えて眺めがよくないので、稜線を東に100mほど移動したところ(写真⑨)で、恵庭岳、樽前山、支笏湖、白老三山、ホコホコ山、徳舜岳岳などを眺めながらお昼を食べました。山頂に戻って記念写真を撮り、1時間15分ほどで登山口に戻りました。

○参加者 L 藤木俊三、神埜和之、谷口美咲、鹿熊寿恵子、神山順子、北川麻利子、藤原千恵、藤原仁、山水秀美

### 無意根山 胡桃沢林道ルート

2月17日【山スキー】

山内忠

日の出がだいぶ早くなったのを実感しながら豊羽元山に向かった。身支度して7時前に出発すると、一本のトレースが伸びていた。余市岳が大きく望める、昨日の新雪が眩しい千尺高地の北斜面(写真⑩)に後ろ髪を引かれつつ、山頂に足を伸ばした(写真⑩)。2月でこんなに風の無い日は珍しく、羊蹄山もくっきり姿を見せている。ラッセルは軽く、馬の背から山頂まで、いつもより楽に感じられた。さて、お目当ての斜面だが、後から来たグループが登り返している最中で3回目だという。まだ誰も入っていない綺麗な斜面を選び、今年の良い雪もこれが最後かなと思いつつ高速で下山した。

○参加者 L 山内忠、荒田孝司、山崎裕侍、三浦一恵、清瀬博昭、横山諒平 (4月入会)



## 北見山地の盟主・憧れの2峰を滑る

チトカニウシ山/天塩岳 2月10日 - 12日 [山スキー] 齊藤宣明

北見山地は、天塩川をつくる盆地列の東に並ぶ山地で、オホーツク海側と日本海側を分ける北海道の分水嶺となっている。なかでも標高の高い天塩岳(1558㍍)とチトカニウシ山(1446㍍)は、道北を代表する山として、冬山、山スキー愛好家の憧れの地となっている。今回の支部山行は、上川のキャンプ場のコテージに泊まって2泊3日で北見山地を縦横に登り滑る贅沢な企画。最も冷え込むこの時期にしか味わえない、さらさらの極上パウダーを存分に楽しんだ。

### ■チトカニウシ山(1446㍍) 2月10日

札幌圏在住の8名と道北在住の佐藤精久会員、長谷川恵美子会員が途中で合流し、予定どおり9時30分に北見峠からチトカニウシ山に入山。道北の山の凜とした空気のたたくまいを感じながら、林道、そして広く平坦な尾根に快調にスキーを滑らせる。途中、電波塔のある台地では、青空に広がる穏やかな雲の間から白滝天狗岳を見ることができた(写真①)。

1258㍍ピークからは山頂部の全貌が見え(写真②)、最後の急登を登りきる(写真③)と、雪中から這松が顔をのぞかせる頂上に到着(写真④)。下りは疎林のパウダー斜面を標高1,170メートル付近まで雪煙を上げながら一気に滑り降りる。シールを付け、登り返して往路の稜線に戻り、再び平坦な尾根を苦労してたどって15時半頃、北見峠に到着。

時間が遅いので温泉入浴はせず、週末移住コテージを2室借りている層雲峡オートキャンプ場に直行する。新しいキッチン棟は広く清潔で、設備も完備。すぐに皆で食



事作りに取りかかる。今回は長谷川さんが全日程の食材を用意してくれた。初日の夕食メニューは、特大の肉団子を包んだ長谷川さん手作りのロールキャベツのポトフ、カツオのたたきのサラダとエビピラフだ。

それぞれが持参したおいしいお酒と料理に舌鼓を打ちながら、翌日の山行に思いを巡らす。結局、複数の候補から多数決で、まだ冬に登ったことのない人が多い天塩岳に決まった。男性陣が朝食用のたまごハムサンドイッチを作り終え、コテージで眠りについた。

### ■天塩岳(1558㍍) 2月11日

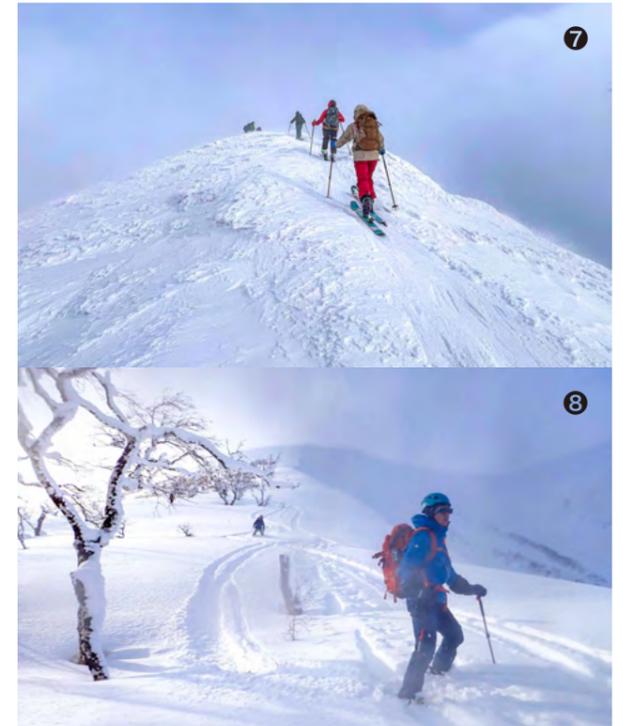
登り口の渚滑川林道入口に駐車できないため、約1.5㌔離れた浮島峠の駐車帯に車をデポ。運転手の3人に登山口までのアルバイトをお願いする。昨日より明らかに冷涼で、その気温差を感じながら、しばらく雪深い沢沿いの林道を進み、一ノ沢と二ノ沢の二股の先から急な尾根に取りつく。健さん、精久さん、まっしー、諒平さんの4人でラッセルを交代しながらジグを切り、転倒したら下まで流されそうな斜面を一步一步上がっていく。

何回キックターンを繰り返したかわからなくなるほど長い急登もようやく終わり、一気に視界が広がる台地状の尾根に上がると、天塩岳の全貌が眼に飛び込んできた(写真⑤)。頂上から直に沢に滑り込んだシュプールが2~3本見える。「あそこを滑り降りるのは危険だな」と思いながら進むが、頂上まではまだ長い道のりだ。

森林限界を越えると急に、雪交じりの風が強くなってきた。風雪に頬を叩かれながら一步一步スキーを進めていく。氷のように冷たい風がジャケットの隙間から容赦なく入り込み、身体がどんどん冷えてくる。斜面は次第に凍り付き、エビの尻尾が無数に形成されたシュカブラと這松の頭が進路を塞ぎ、歩きづらくなる。頂上への最後の登り(写真⑥)はアイゼンを装着するか迷ったが、強風のなかではそんな余裕はなかった。

頂上には14時に到着(写真⑦)。皆で固い握手を交わして登頂の喜びを分かち合う。記念撮影後すぐに下山に取りかかるが、日はもう傾き始めている。シールを付けたまま直下の這松帯から高度を落とす。ここで精久さんのストックの片方が折れるアクシデントが発生。モアイ像のような樹氷を眺め、すさまじい強風のなか、黒川支部長を先頭に下降点となる尾根まで慎重に登路をたどる。下りの滑り(写真⑧)は、前日のチトカニウシよりもはるかに軽くさらさらな深雪斜面に、思い切りスキーを走らせる。転んだらどこまでも沈み込んでしまうような雪質だ。振り返ると精久さんが一本杖で巧みにスキーを操りながら降りてくる。

一ノ沢の沢底まで全員無事に降りて、ほっと一息つく。休憩中に諒平くんが、精久さんの折れたストックを手早く応急処置して使えるようにした。ここからは長い林道歩き。深い谷間に日没がどんどん迫ってくる。やがて完全に闇の世界に入ってしまった。ヘッドランプの灯りを頼りに慎重



に進む。身体が冷え切ってしまうように動かないが、声をかけ合いながら頑張って進む。

18時過ぎによく、国道を走る車のヘッドライトの灯りが見え、無事に下山した安堵感に包まれる。疲れているなか、諒平くんに峠まで歩いて車を取ってきてもらい、次に残りのドライバーで車を回収して閉店間際の上川の入浴施設に向かう。30分ほど湯につかって身体を温め、コテージに戻ったのは20時過ぎ。大きなカキを入れたチゲ鍋を作る。無事登頂したうれしさか、皆んな疲れもみせずに話に花が咲く。締めラーメンを啜り、シナモン入りのホットワインを飲みながら身体を温めると、どっと疲れが出て深い眠りについた。

3日目の12日は、皆んな疲れているので、山行を取りやめ休養日とすることに異論は出なかった。長谷川さんが淹れてくれたチャイを飲み、うどんを食べてから、氷瀑となっている銀河の滝と層雲峡ビジターセンターを見学した。センターのスタッフの国井さんから層雲峡の成り立ちを歴史上の人物の興味深いエピソードも交えながら解説していただいた。3日目にして初めて本当の温泉=層雲峡温泉にゆっくりつかり、帰路についた。

今山行後の週明けから暖気が入り、上質な雪質を味わうことができたのもこれが最後かと思うと、ひとしお感慨が湧いてくるのであった。

○参加者 CL 黒川伸一、SL 田中健、SL 佐藤精久、山崎邦子、増田智朗、長谷川恵美子、齊藤宣明、小玉孝之、小川茉莉、横山諒平(4月入会)

## 白樺山 老古美ゲートから

2月18日【山スキー】

黒川伸一

明治後期の開湯以来、100年の歴史を誇った新見温泉が閉鎖、取り壊しになって4年。それまでは、除雪が行われていた新見温泉から行きやすかった白樺山(950㍎)だが、現在は蘭越町側から除雪が入らず、北側の共和町・老古美ゲートからの入山が定番となってしまった。

参加者11人が共和町のセイコーマート国富店前に集まり、ニセコパノラマラインの老古美ゲートに向かった。先行者の車が1台駐められており、我々は2番手だった。晴天ではあるが、上空からはゴーゴーと風音が聞こえ、風が強いことが分かる。高気圧からの暖かい南風だから何とかなるだろうとタカをくくって、快調にシラカバやダケカンバの森を行く。パノラマライン横断地点からは目国内岳が白く輝いており、期待を抱かせた。積丹半島の山々をバックに山頂を目指す(写真①)。

が、稜線が近づくにつれ、風は思いのほか強く、南斜面側から雲を発生させており、稜線手前でガスの中に入ってしまう。何とか山頂稜線上まで上がるが、シャクナゲ岳方面へ移動したり、南斜面を滑降できる状況とは判断できず、強風吹き荒れるなか、ここからの撤退を決め、北斜面への滑降に切り替えた。

北斜面は前日の日射の影響を多少は受けており、春の



ような雪を滑った。パノラマラインあたりまで降りてきたら、雲も消えてすっきりした晴天模様になり、再び目国内岳が輝いていた(写真②)。何とタイミングの悪いことか。出発を遅らせるべきだったかと自問自答しながら下山し、ワイス温泉で汗を流して帰路についた。

○参加者 CL 黒川伸一、今芳文、長谷川恵美子、渡部雅寿、佐々木朋代、須田康仁、高尾美緒、小川茉莉、清瀬博昭、酒井史明(4月入会)、横山諒平(4月入会)

## 京極山荘合宿 羊蹄山/喜茂別岳

2月23日-25日【山スキー/スノーシュー】 清水義浩

2月23日の天皇誕生日からの3連休、札幌山の会の京極山荘をベースに、3泊4日の山スキーとスノーシューの合宿を行った。初日、札幌は45㍎の大雪。午後1時に京極山荘前に集合。山荘までの道をスノーシューで踏み固め、薪ストーブを燃やし、近くの京極温泉で汗を流してから、山荘で大宴会。雪もやみ、夜は晴れ渡り、星空とほぼ満月の十四夜で暗闇に羊蹄山の素晴らしい山容が浮かび上がり、翌日への期待が膨らむ。

2日目、朝から羊蹄山の頂も見え、午前8時に山スキー班とスノーシュー班の総勢11名で羊蹄山に出発(写真③)。標高を上げるにつれて眺めがよくなる。特に、喜茂別岳から並河岳、中岳、無意根山までの山並みが素晴らしい。さらに登ると、今度は札幌市最高峰の余市岳や、白老三山から樽前山、風不死岳、恵庭岳、漁岳、空沼岳、狭薄山、札幌岳など、名だたる山々が見える。

午前11時15分に標高1200㍎に到達。それより上部は新雪の下がアイスバーン状態の所もあり、雪も降り始めたため、ここから下山。下がるにつれ雪質もフカフカの状態で、山スキー班は各自、思い思いの滑りを楽しむ。途中スノーシュー班を追い抜き、小屋に到着。

この日は山荘で東北大学山岳部の学生とジョイント。夜はジンギスカンで交流を深めた。

3日目も朝から天気が良く、羊蹄山が美しい姿を見せている。喜茂別岳に向けて車で移動し、すでに早朝に出て登っている東北大学メンバーのトレースを使わせてもら



う。午前8時30分に出発。無風の中、羊蹄山やニセコ連峰などを見ながら標高を稼ぐ(写真④)。稜線からは、喜茂別岳の山頂に東北大学のメンバーの姿が見え、彼らの華麗な滑りを眺める。登るにつれて、所々アイスバーンとなり、午後1時前に喜茂別岳山頂に到着。眼前には、並河岳から中岳、そして無意根山の山並みが続き、さらに、定山溪天狗岳、手稲山、烏帽子岳、神威岳、札幌岳、漁岳、恵庭岳などの素晴らしい眺めを堪能。

下山後、再び京極山荘に戻り、この夜も東北大学の学生らと一緒に楽しい宴。天候に恵まれ、雪質もまずまず、あつという間の3連休。若人らとも交流でき、楽しい合宿でした。

○参加者 L 橋本一郎、清水義浩、鈴木貞信、常本良一、藤木俊三、荒田孝司、神山順子、中沢友佑、藤原千恵、藤原仁、石丸なみ

## 中愛別山/岩尾岳

3月2日-3日【山スキー】 小川茉莉

1泊2日で、下川町・五味温泉のコテージ「美桑の家」を使ったスキー山行に行きました。

悪天候予報のため、1日目(3月2日)は目的地を当初の登和里山-砥割山から中愛別山に変更して、雪が降りしきり中、愛別町へ。パンケムナイ川沿いの林道除雪最終地点に駐車して出発。ひざ下ラッセルを交代しながら、林道から疎林帯を進み、2時間程度で頂上へ(写真⑤)。

山頂からはパウダースノーの疎林斜面を雪煙を上げながら滑降して(写真⑥)、お昼過ぎには下山し、今回の山行のメインともいえる五味温泉の「美桑の家」へ向か



きました。

コテージに到着後、美人の湯と称される「含二酸化炭酸水素塩泉」を満喫。美桑の家は、下川町で伐採されたカラマツで建設され、環境共生型モデル住宅(エコハウス)とされています。木の温もりを感じられ、体も心も温くなる家です。広い窓からは真っ白な雪景色。

外は猛吹雪の中、夜は、ドキュメンタリー番組のプロデュースで文化庁芸術選奨の文科大臣賞(放送部門)を受賞したばかりの山崎裕侍さんのお祝い、齊藤宣明さんのアコースティックギター演奏会で盛り上がりました。

岩尾岳に向かう予定の2日目(3月3日)朝は大雪トラブル。コテージ前に積もった30㍎ほどの新雪で車がスタックし、除雪車にけん引してもらうことに。移動経路の道道でも2度にわたりスタックするなどして時間がかかりましたが、何とか出発地点の岩尾内ダム駐車場へ。

岩尾岳を目指して、岩尾内湖脇の林道を進み、沢から尾根へ。長い林道と膝ラッセル(写真⑦)が続く中、木が多かったりで時間がかかり、なかなかスムーズに歩を進められず、標高700㍎ほどで撤退しました。下山途中には時折、陽がさしてきて岩尾内湖と林道が照らされ、綺麗な景色が広がりました。



○参加者 CL 黒川伸一、SL 増田智朗、齊藤宣明、山崎裕侍、佐々木朋代、高尾美緒、平松昌子、小川茉莉、清瀬博昭、横山諒平(4月入会)

昆布岳／長万部岳

3月9日-10日【山スキー】 黒川伸一

今年も黒松内ぶなの森自然学校を拠点としてスキー山行を実施した。札幌からなかなか日帰りでは行けない渡島半島北部の山、4山（予備2山）の山行を事前に準備し、天候や風向きに合わせて3月9日に昆布岳（1045㍍）南面、10日に長万部岳（973㍍）東面に入った。

■昆布岳（1045㍍） 3月9日

昆布岳をスキーで登り、滑降するなら、斜度と距離を考えると南面がベストではあるが、西昆布岳経由だと烏帽子岳（944㍍）や888㍍峰を越えなければならず、その先の細尾根の通過も厄介なので、スキールートとしてそれ以外の4パターンを想定。南側のアプローチとなる道道新富上里線の除雪状況が分からなかったので、除雪スペースを確認した上でルートを選ぶ現地判断とした。その結果、ラッキーなことに夏道の登山口前が除雪されていたためにここからスタートしたが、下山後に登山口脇の住民に聞いた話では、たまたま除雪していたようで、ラッキーだったかもしれない。

9日朝、支部メンバーのほか、東京・三峰山岳会の2人も加えた12人が、待ち合わせ場所の道の駅ニセコビュープラザに集まった。昆布岳に向かうことで一致し、前記の登山口をスタート。勝手知ったる登山道ルートであり、「合目」標識が1合ごとに配されているためにモチベーションも上がり、快調に高度を上げた。北風が旺盛だが、視界は良好。この時期の雪に埋もれた5合目の「メガネ岩」もなかなか趣がある。

標高930㍍～950㍍の岩場地形は雪庇が張り出しており、西側を巻くが、風上のため部分的に雪が飛ばされて雪面が堅く、スキーアイゼンのツメを利かせて通過。スキーアイゼンのない精久さんはスキーを脱いでツポ足で直上して難所通過後にスキーを装着し、無事全員で登頂した（写真①）。登頂時には風もやみ、噴火湾、洞爺湖などが指呼の間にのぞまれた。



①



②



③

南斜面なので前日の日射の影響があったが、山頂直下のオープン斜面（写真②）を滑った後はツリーランが続いた。途中、滑降ルートの1つに考えていた826尾根に迷い込んでしまい、このルート修正とメガネ岩周辺の登り返しでやや時間がかかったが、あとは登り口までツリーランを楽しんで下山。

所用のある精久さんと別れた後、寿都温泉でひと汗流して、黒松内ぶなの森自然学校へ。皆さんで手分けしてスープカレーに居酒屋メニュー3品を作り、夜遅くまで楽しい宴が続いた（写真③）。

■長万部岳（973㍍） 3月10日

翌10日は、黒松内低地帯の南の方が雲量が少ないことが予想されていたこともあり、長万部岳を選んだ。黒川と増田は2年連続の長万部岳（昨年は山頂手前まで）だが、少しでも好天となることを期待して、11人で除雪最終地点からノーマルルートでブナ林とダケカンバ林の中を進む。時々雪が舞ったり、ガスがかかる天気だっ



④



⑤

たが、概ね視界は良好で、「鉱山跡」に到達した段階では白く輝く山頂がきれいにのぞめた。

鉱山川の源頭を緩やかに登って回り込むルートで山頂北の鞍部へ。雪がちらちら舞っているが視界は利いており、山頂稜線西側のダケカンバの疎林にジグを切って登り、山頂台地へ。2022年3月と同様、山頂手前に高さ5㍍ちよつとの段差ができていた（写真⑤）が、雪庇を崩して山頂標柱のあるピークに全員で達した（写真④）。

山頂台地からは疎林に積もった新雪を蹴散らしながら、快適なツリーランで下山を急いだ。太平洋に近い山だが、黒松内低地帯沿い特有の積雪の多さが、この山の魅力であり、スキー山行向きの山とあらためて感じた次第だ。

○参加者 CL 黒川伸一、SL 増田智朗、SL 佐藤精久、山崎邦子、今芳文、小玉孝之、佐々木朋代、高尾美緒、酒井史明（4月入会）、横山諒平（4月入会）  
〈会員外〉 齊藤吉夫（山崎友人）、深谷千明（山崎友人）

喜茂別岳

3月19日【スノーシュー】 峠原直実

北海道の山に魅せられ、年に5回ほど北海道に滞在している峠原直実と申します。東京在住ながら北海道支部に所属させてもらい、支部の皆さんとも時々一緒に登っています。今回は支部山行の喜茂別岳スノーシュー・ハイクに参加させて頂きました。

当日は朝8時に中山峠の駐車場に集合。身支度をしている時に気がついたのですが、皆さんは長靴やスノーブーツを履いてスノーシューを付けているではありませんか。私は冬の登山靴。聞くとスノーブーツの方が足元が温かいとのこと。登山靴でなくてはいけないと思いこんでいた私にとっては目からうろこ。要するにスノーシューを装着できればいいということ。靴を履き替える手間もなく、荷物も少なく、早くていいです。

8：16スタート。前日から降り積もった雪で林道はト

レースもなく、スタート時からラッセル。場所によっては膝まであり、このような深雪で先頭を歩いてラッセルさせてもらうのは初めての経験。なかなか楽しく歩きましたが、翌日はお約束の筋肉痛に。

誰も歩いていないところを歩くのは快適です。先頭は皆で順番に代わりながら進んでいくので、人数が多ければ、先頭で大変な思いをしても、後方につくと踏み固められた後なので、とても楽に歩けます。先頭を歩くとの差がすごい。

ダケカンバやエゾマツに雪が付き、とても美しい景色を堪能しながら進みます。想像以上に長い林道で、NTTの鉄塔を越えるとやっと山に入ることができました。とは言っても傾斜がきついわけではなく、お天気が良ければ楽しいハイクができそうなコースでした。この日は雪が降ったりやんだり、アニマルトレースも登りではまったく見ることができませんでした。

眺望が素晴らしいとの情報で、それを期待しながら登ります。森林限界を越えると眺望が開けてきて、尻別岳は目の前に。中山峠のグレンデも見えます。美しいフォルムの羊蹄山の姿を期待していたのですが、残念ながら裾の方しか見えませんでした。

13：16分ピーク到着（写真⑥）。景色は良かったのですが、風との戦いになりました。とにかく強風で顔が痛いほどで、頂上では景色を楽しむのもそこそこに全員で記念撮影をし、早々に13：32下山開始。地吹雪で雪が飛ばされてカリカリになった斜面はとても歩きやすく、楽しく歩きました。頂上付近は強風で登りのトレースがあっという間に消えています。風のないところまで下ってからランチ休憩。林道はほぼフラットなので帰りは楽！ということではなく、黙々と林道を歩き、17：00無事下山。

ウェアや靴のこと、皆様の装備、いろいろ勉強になりました。企画をして頂いた藤木さん、ご一緒させて頂きました皆様、ありがとうございました。また、来ます！

○参加者 L 藤木俊三、峠原直実、谷口美咲、北川麻利子、藤原千恵、藤原仁、山水秀美



⑥

コスヌプリ - 美真岳

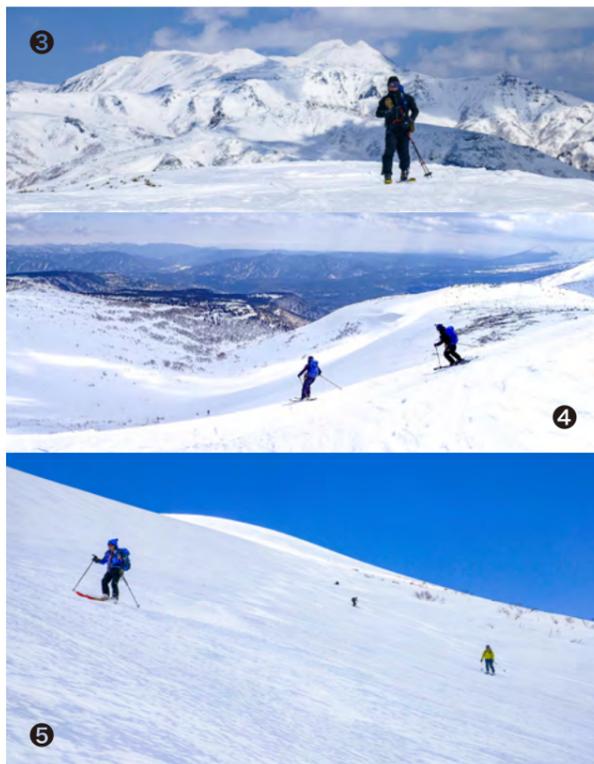
4月6日-7日【山スキー】 長谷川恵美子

コスヌプリ(1626㍎)は、トムラウシ山とオプタテシケ山との主稜線から東に200㍎ほど離れたところにある。コは小、ヌは岩、プリは山、つまり「小さな岩の山」と小泉秀雄が命名し、1918年に日本山岳会機関誌「山岳」第12年に発表された。今回のスキー山行は、このコスヌプリと隣の美真岳(1668㍎)の頂上を踏み、その間のタテヤ沢源頭部を滑降することが目的である。

6日午後、札幌組と鹿追の神田日勝記念美術館前の道の駅で合流。十勝が生んだ画家、神田日勝の絶筆「未完の馬」が目に入る。それは何か1つの生命体の律動やもの悲しさ、生きし人の深いため息や日々の思いが伝わってくるようで、いつも見入る。トムラウシ温泉への道を行き、トノカリ林道へ。キャンプ予定地の北電取水施設までは除雪が入っておらず、殿狩橋より少し手前にテントを張る。すき焼きで入山祝い。夜見上げた空に満天の星が素晴らしかった。明日の晴天が期待される。

7日、朝5:00、期待通りの晴天の中スタート。トノカリウシュベツ川沿いの林道を歩くこと1時間ほどで、青空に真っ白なオプタテシケ山が見えてきた。天気がよく気分も爽快、元気が出る。6:50にオプタテシケ川にかかる三股橋を渡り、緩やかな登りが続く。やがて林道も途切れ、タテヤ沢に向かい少しずつ降りながら徒渉地点を探す。8:30、徒渉。込み入った針葉樹林帯を避けて、少し傾斜のきつい、疎な広葉樹林帯をいくことにする。

右のトノカリシベツ山上の湿原から水鳥の鳴き声が聞こえる。見上げると、青空に美しいV字形の白鳥の群れが北の空へと向かっていった。オプタテシケ山は正面か



ら左後方へと見える向きが変わり、円錐形の大きなその山の右に、目指す美真岳がなだらかな姿を見せる。

やがて、頂上に小さな岩をのせたコスヌプリが見えてくる。南西側の斜面はすでにハイマツが出ていて登りにくそうなので、少し東側から頂上を目指す(写真①)。トムラウシ山、ニベソツ山、遠くに日高山脈、眼前には雄大なオプタテシケ山や下ホロカメットク山などの山並みに囲まれ、11:30にコスヌプリの頂上に立った。初めての頂からの景色は、その感動を表現する言葉が見当たらないほど素晴らしかった。そして、ハイマツが所々出る西側の斜面を降り、美真岳へ(写真②)。強い風が体を押す。12:15、トムラウシ山を背景に爆風の美真岳頂上(写真③)。オプタテシケ山がさらに眼前に迫る。

タテヤ沢の源頭の真っ白な広い斜面は、雄大な自然のゲレンデのよう(写真④)。思い思いにシュプールを描き、滑る(写真⑤)。長い登りの後の楽しい時間だ。やがて、タテヤ沢沿いに樹林帯を降り、徒渉地点にびたりと出る。行きも帰りも、リーダー、サブリーダーのルートファインディングと判断は的確で、頼りになる。15:00に最後の徒渉地点を通過、林道に入り、自動運転とウォークモードで16:15にスタート地点に戻った。

約11時間、25㍎の長い山行だったが、疲れを忘れるほどに達成感に満たされた感動の一日だった。  
○参加者 CL 黒川伸一、SL 田中健、今芳文、長谷川恵美子、山崎裕侍

2024年内の主な山行予定

\*日程や行き先は変更になる場合があります

- 5月4日(土) ●余市川源流-余市岳【山スキー】 L:黒川 日帰り
- 5月5日(日) ●暑寒別岳/増毛天狗岳【山スキー】 L:黒川  
～6日(月・祝) 増毛町「はまなす会館」前泊
- 5月12日(日) ●白雲岳幻の湖を見に行く【登山道】 L:藤木  
～14日(火) 黒岳石室泊 ※予備日1日 ※中止の場合あり
- 5月14日(火) ●熊野古道集中山行・大峯南奥駈道【登山道】 L:山崎邦  
～19日(日) 山小屋・テント泊
- 5月19日(日) ●狩場山【山スキー】 L:黒川 島牧コース前泊
- 6月15日(土) ●アポイ岳周辺 & キャンプ【登山道】 L:黒川  
～16日(日) キャンプ場コテージ泊
- 6月23日(日) ●岩登り研修・赤岩【クライミング】 L:後藤・齋藤(申込先=黒川)
- 6月29日(土) ●有珠山周辺のプットパス【軽登山】 L:黒川  
～30日(日) 壮瞥町・森と木の里センターのバンガロー泊
- 7月6日(土) ●大雪山・銀泉台-赤岳-小泉岳(花パト合同パトロール)【登山道】 L:藤木 前泊未定
- 7月6日(土) ●沢登り研修&キャンプ・登別川-オロフレ峠または裏沢-室蘭岳【沢登り】 黒川  
～7日(日) 壮瞥町・森と木の里センターのバンガロー泊 & バーベキュー
- 7月13日(土) ●東北・北海道地区集会・山行(裏磐梯)参加者で東北の山登山【登山道】 L:藤木・黒川他  
～15日(月・祝)-16日(火) \*安達太良山・吾妻連峰などを予定
- 7月20日(土) ●留知暑寒別沢-雄冬山【沢登り】 L:佐藤精・黒川  
～21日(日) テント泊
- 7月28日(日) ●ポン三ノ沢-野塚岳【沢登り】 L:黒川 浦河町・オロマップキャンプ場前泊
- 8月3日(土) ●パンケニワナイ川-斜里岳+α【沢登り】 L:田中  
～5日(月) キャンプ場コテージまたはテント泊
- 8月上旬 ●東大北海道演習林-大麓山(富良野市麓郷)【軽登山/スケッチ】 L:荒田 宿泊未定
- 8月11日(日) ●カムイエクウチカウシ山【登山道・沢】 L:山内  
～12日(月・祝) テント泊
- 8月17日(土) ●オプタテシケ山または美瑛岳【登山道】 L:藤木 \*18日～19日に変更の可能性あり  
～18日(日) 小屋またはテント泊 \*美瑛富士避難小屋携帯トイレブース点検清掃活動に合わせて実施
- 9月7日(土) ●小田西川-狩場山【沢登り】 L:田中  
～8日(日) 沢中テント泊
- 9月17日(火) ●大雪山・愛山溪温泉-松仙園(お月見山行)【登山道】 L:藤木  
～18日(水) 愛山溪ヒュッテ(自炊)泊 \*中秋の名月と紅葉と芋煮を楽しむ山行
- 9月21日(土) ●剣山/久山岳/ベケレベツ岳【登山道】 L:黒川  
～23日(月・祝) オートキャンプ場コニファーのコテージ泊
- 10月13日(日) ●キノコを楽しむ山行【登山道/キノコ採取】 L:山崎邦  
～14日(月・祝) 山域・宿泊未定
- 10月19日(土) ●元山-笹山-八幡岳(低山縦走)【登山道】 L:黒川  
～20日(日) 江差町で民泊
- 11月30日(土) ●上ホロカメットク山(冰雪訓練)【アイゼン・ピッケル】 L:後藤・齋藤(申込先=黒川)  
～12月1日(日) 白銀荘泊
- 12月20日(土) ●十勝岳連峰・カミフェリア(山スキー合宿)【山スキー】 L:黒川  
～21日(日) 白銀荘または上富山荘泊

\*随時山行を企画します。その都度 ML や本紙などでお知らせします。

\*実施日の1～2週間前までに、各リーダーなど下記連絡先までお申し込みください。

礼文島の実家の寺で副住職を務めながら、ヒマラヤの高峰や礼文島のアイスクライミング・ルート開拓に燃える北海道支部会員をご存知ですか。昨年入会した齊藤大乗さん(38)は僧侶でありながら、元自衛官、ライター、アニメ技術監修、歩荷、ラフティングガイド、スノーボードインストラクターなど、多彩な顔とキャリアを持っています。大乗仏教に因んだ名のダイジョウさんは、自然豊かな故郷・礼文島のすばらしさを多くの人に知ってほしいと言います。そんな思いを、自己紹介を兼ねて執筆してもらいました。

＊

北の島からこんにちは。みなさん初めまして、礼文島在住の齊藤大乗と申します。

礼文島の北部に久種湖という日本最北の湖がありますが、その湖の近くにある日蓮宗寺院、妙慶寺の副住職をしております。普段はお檀家さんの家に月参り(これは北海道だけの文化)を行っているのですが、時折、NHK「にっぽん百名山」の撮影補助をしたり、地熱発電所の建設適地を探すために日本中の温泉地域に機材を背負って赴いたり、森林調査のために日本中の森を踏査したりしており、さらに今年からは、JMGA(日本山岳ガイド協会)のガイド資格や北海道アウトドアガイドのカヌーガイドの資格を取得して、礼文島のアクティビティを充実させ、ゲストハウスも開業しようと現在勉強中であります。



飯豊連峰で40キロの荷物を背負って撮影歩荷



初登頂したサウラヒマールで。左が筆者

さて、簡単にはなりますが、僕のこれまでの経歴を紹介させていただきます。18歳まで礼文島で過ごし、僧侶になるために山梨県・身延山にある日蓮宗の大学に入学して勉強しました。その後、このまま僧侶になっても面白くないと思い、陸上自衛隊に入隊。千葉県木更津市にある日本最大のヘリコプター部隊に勤務し、東日本大震災のときは発災翌日から被災地に派遣されました。

## 礼文島から氷壁登攀、ヒマラヤの未踏峰へ

齊藤大乗

登山との出会いは、自衛隊で勤務していた時。隣の部屋の先輩から「山に行くぞ」と、八ヶ岳の阿弥陀岳～赤岳～硫黄岳の、通常は1泊2日のコースに日帰りで行かれたことにより、山の楽しさに目覚めました。自衛隊を退官した後は、山梨県から静岡県に流れる富士川でラフティングガイドを3年ほど行いながら、軍事系解説などの執筆をしていました。

山を楽しんで、川も楽しむ。そんな生活をしていたところ、現在日本山岳会でヒマラヤキャンプを主催している花谷泰弘さんと出会い、2018年に第3回ヒマラヤキャンプに参加しました。初めての海外高所登山、しかも未踏峰。毎日アクシデントに見舞われましたが、初登頂したパンカールヒマール(6264m)からは、日本人の心の山マナスルを正面から見ることができました。この景色は誰も見たことがない、自分の通ったあとが道になる。この強烈な体験が今の自分を作ったと思います。

2022年、コロナもゴールが見え始めたころ、「未踏峰

に行きたい」熱が発症。今回は花谷さんの力を借りず、自分の力で行こう!と決意。友人と2人だけの小パーティーで春に未踏峰を目指しました。全く不安がなかったのは、4年前に登ったパンカールヒマールの隣の山サウラヒマール(6235m)に挑んだからです。90%は偵察されている、だけど残りの10%は誰も踏み入れたことがない。そして「みんなで登った山を見てみたい!」。ハプニングだらけでしたが、その思いで無事登ることができました。マナスルとパンカールヒマールが同じ視野に入った瞬間、嬉しさと2018年の苦労がフラッシュバックし、涙で視界が霞みます。

下山後、ネパール人ガイドのチェトさんに「ダイジョウさん、この先に未踏峰はまだあるよ!登りに来ない?」と誘われました。そのタイミングで野村良太君(北海道支部会員)が北海道分水嶺を踏破して襟裳岬に到達したとのニュースがネパールの山奥まで流れてきました。記事を読み、いつか野村君と未踏峰に登りたいと思っていると、その年の夏には知り合うことができ、翌2023年には一緒にジャルキャヒマール(6473m)に挑戦していました。結果的に登頂はできませんでしたが、いつかまた挑戦したいです。

最後に皆様に、礼文島のアイスクライミングのエリアを紹介させていただきます。礼文島の西側の海岸は季節風の浸食を受けた崖が南北にあります。そこにはアイスクライミングを行える無数の氷壁がずらりとならび、最近では高柳傑さんや舟生大吾さんも開拓にいられました。そして今年1月には、以前から目をつけていた100mを超える礼文大滝が竹中源弥さん、鈴木雄大さんらによって初登されました。冬の礼文島はアイス天国であり、岩場が多いので夏もロッククライミングもできるのではないかと考えています。礼文島を訪れるのは大変だと思うのですが、みなさんには遊びに来てもらいたい、山行に来ていただきたいと思っています。



礼文島でアイスクライミング

### 増毛山道の道普請にご協力願います!

増毛山道の会

多くの当支部会員が所属し、山岳古道調査にも協力してもらっているなど、当支部との関わりが深い増毛山道の会から、下記のような依頼が届きました。ご協力いただける方は、荒田会員までご連絡ください。

＊

NPO法人増毛山道の会では毎年、6月から10月中旬の土曜日(8月は除く)に、計17回に分けて全長32kmの道普請を行っています。クマイザサは、地下茎を伸ばして1株で最大3畝程度まで広がると言われています。毎年、笹刈りを実施しなければ、せっかく復元した山道も失われてしまいます。加えて会員の高齢化により効率的な作業が難しくなってきました。昨年は、北海道山岳ガイド協会の皆さまが公益的の事業の一環として手助けしてくれました。日本山岳会北海道支部の皆さまのご協力を切にお願いいたします。

＊

【連絡先】荒田孝司

### 白石ルールの宿泊料金改定のお知らせ

この4月から、白石ルールの宿泊料金を下記の通り改定いたしました。これまで長らく4月～10月の期間は1人1泊1,000円、11月～3月の期間は1人1泊1,500円としていましたが、3月14日の支部常任委員会にて、燃料費や寝具のクリーニング代金等、諸物価の高騰の折、値上げもやむなしとの結論に至り、協議の結果、2024年度から500円ずつアップすることに決定したものです。諸般の情勢に応じた対応とご理解願います。

〈白石ルール宿泊料金〉(2024年4月1日改定)

- 4月～10月 1,500円/1人1泊
- 11月～3月 2,000円/1人1泊

なおルール宿泊希望者は必ず事前に神堃和之会員、荒田孝司会員までご連絡いただけるようお願いいたします。

【連絡先】

神堃和之

荒田孝司

ルール担当: 神堃和之、北川麻利子、谷口美咲、荒田孝司

## 2024年度北海道支部総会を6月1日に開催

# 2024年度 日本山岳会北海道支部総会

【日時】6月1日(土) 14:00-15:30 (受付開始 13:30)

【会場】かでの2・7 北海道立道民活動センター 1070会議室  
札幌市中央区北2条西7丁目 道民活動センタービル

【議案】2023年度事業報告・収支決算報告  
2024年度事業計画・収支予算案 他

【懇親会】大庄水産 札幌市中央区北4条西4丁目 読売北海道ビル2階  
16:00-18:00 会費：4,000円

向こう1年間の支部の活動方針、事業計画、予算等を決定する重要な会議です。別途送付または同封の議案書をお読みいただき、5月20日までに議案書と同封のハガキにて出欠等をご返信ください。

なお会友の皆様には議決権はありませんが、総会を傍聴できるよう準備いたします。懇親会にもご出席いただけます。

## 【至急】第37回 東北・北海道地区集会【福島】申し込み締切 4.26 迫る!

東北6県の支部を中心とした会員・会友が交流を深める毎年恒例の東北・北海道地区集会。福島支部の主催で7月に裏磐梯で開催される今年の集会の申し込み締切が間近に迫りました。参加希望者は至急下記へご連絡ください。

なお来年2025年の第38回の集会は、北海道支部主催で「支部創立60年記念」を兼ね、7月11日～12日に洞爺湖温泉と日本初の世界ジオパークの一つである有珠山・昭和新山周辺で開催予定。戦後だけでも3回の噴火を経験したこのエリアの魅力を探ります。

【日時】7月12日(金)～13日(土)

【主催】公益社団法人 日本山岳会福島支部

【会場】裏磐梯 グランデコホテル  
福島県耶麻郡北塩原村大字檜原字荒砂沢山

【日程】7月12日(金)

●支部長会議 15:00-15:20

●記念講演 15:30-16:50

「世界を魅了する、奥会津・只見線」

星賢孝氏(日本山岳会福島支部会員)

●懇親会 19:00-21:00

7月13日(日)

①猫魔ヶ岳(1,403m) 登山 4時間30分

②裏磐梯五色沼湖沼群トレッキング 3時間30分

【会費】20,000円/人(宿泊費、懇親会費、交通費等) 【申し込み締切】4月26日(金)

【申込方法】2日目のAかBを選んで下記宛てにお申し込みください。

【申込先】井田雅之事務局長

### 〈記念講演講師プロフィール〉

星賢孝(ほし・けんこう)さん

奥会津と只見線にこだわって撮影してきた郷土写真家。2019年5月には『只見線写真集・四季彩々』を出版。新聞テレビ等のマスコミにも多数出演し、只見線の復活に尽力した。2022年に全国公開された映画『霧幻鉄道 只見線を300日撮る男』は、そんな星さんの姿を追ったドキュメンタリー。日本山岳会福島支部会員であり、写真以外にも、山登り、カメラ、自転車、山スキーなどを通して奥会津の素晴らしさを自身で体感し、発信している。

## 大雪山“花パト”の24年度パトロール員を募集

北海道生活環境部から生物多様性保全事業の一環として委託を受け、支部の公益事業として毎年実施している「大雪山国立公園高山植物盗掘防止パトロール」(花パト)。2024年度も実施要領はほぼ例年通りで、パトロール員として募集するのは、6月1日から10月10日までの期間に大雪山国立公園で3日程度パトロールできる方。山岳傷害保険への加入が条件となりますが、活動を行った方には保険料の一部が助成されます。パトロール員に登録希望の方は下記までお申し込みください。

【申込・問い合わせ先】

藤理恵子

【申込締切】4月30日

### 【自然保護研修会】

【日時】5月23日 18:00～ 【会場】札幌エルプラザ

【講師】伊藤健次(写真家)

説明会を兼ねた自然保護研修会は写真家の伊藤健次氏をお迎えして開催予定です。(テーマ未定)

〈講師プロフィール〉伊藤健次さん

写真家。1968年生まれ。北海道大学在学中から広く道内の山野を歩き、日高山脈や大雪山の冬期単独全山縦走を敢行。カナダ、アラスカ、カムチャツカ半島での海外登山を経て、近年はヒグマやシャチの撮影のほか、北海道の原風景に通じる極東ロシアの森を旅し、新聞、月刊誌で作品を発表している。

## 「どうする!どうなる?日高山脈国立公園化」をテーマに活発な議論

山のトイレを考える会主催による年に1回の山のトイレフォーラムが、今年は「どうする!どうなる?日高山脈国立公園化」と題して3月9日に札幌エルプラザ2階「環境研修室1・2」で開催された。

パネルディスカッションでは、当支部の藤木俊三支部長と高橋健会員(日高山脈ファンクラブ事務局長)が、環境省帯広自然保護官事務所の山北育実自然保護官、十勝山岳連盟の齊藤邦明会長、山のトイレを考える会の仲俣善雄事務局長とともにパネラーを務め、今夏にも指定される予定の日高山脈国立公園の野営地、避難小屋、登山道、焚き火、ヒグマ、案内標識などについて議論。

野営地を指定すべきか、焚き火禁止とすべきか、携帯トイレブースや案内標識は設置すべきか、登山道は誰がど



のように整備、維持管理するのか、その資金はどのように、といったテーマについて、各パネラーがそれぞれの主張を発表し、参加者も含めて活発な意見交換が行われた。

## ヤマテン猪熊さんを講師に「山の天気ライブ授業」、10月下旬に手稲山で

北海道支部は本年度の公益事業として今秋、国内唯一の山岳気象専門会社ヤマテンの創業者で山岳専門の気象予報士、猪熊孝之さんを講師に招いて「山の天気ライブ授業」を実施します。希望する会員・会友に加え、一般から募った参加者を対象に、10月26日(土)に

札幌・りんゆうホールで座学を行い、翌27日(日)に手稲山で実地の観天望気の集いを行う予定です。

今後、詳細を決めて、夏を目処に支部通信や支部のフェイスブックで発表し、参加者を募りますので、会員・会友の皆さんも奮ってご参加願います。

## 会員・会友の動向

■新入会員	藤原 千恵	17219	菊地 宏治	17272	
	吉田 郁子	17221	■物故会員	森下 雅幸	9775
	酒井 史明	17224	■退会会員	横川 政行	13564
	平松 昌子	17225		飯島 裕幸	15694
	横山 諒平	17227		鈴木加奈子	16803
	藤田 宗昭	17267	■退会準会員	齊藤 吉江	A0529

書籍紹介

神原照子さん夫妻が集大成の「三角点巡りと回想の山々」を出版

当支部の会員である登別市在住の神原照子さんが夫の正紀さんと、山人生の集大成として「三角点巡りと回想の山々」を自費出版された。

積雪期、無雪期を問わず日高山脈の山130座以上を登り、「日高辿路」の著書がある照子さん、芦別岳r（ガンマ）ルンゼ左股奥壁に無雪期・積雪期合わせて3つの初登攀記録を持つなどクライミングの世界で知られた正紀さん。そうした、それぞれの激しく厳しい登山の時代から、二人で計17回に及んだ海外登山を経て、この10年は「ラフな登山を」と、夫婦二人で三角点巡りに取り組んできた。今回の著書は、その三角点巡りの記録を総括したほか、それ以前の、日高山脈、海外登山、クライミングなど、厳しい登山の時代の回想をもまとめた一冊だ。

「胆振（西部・中部）と周辺の三角点巡り」「地図測量の歴史と北海道の基線・天測点・特徴のある三角点を求めて」「柴崎芳太郎の足跡『北海道編』『忘れ得ぬ山々』の



登別市「温泉山」の三角点の前での神原夫妻のほか、近接する黒松内町、蘭越町、留寿都村、喜茂別町、真狩村、ニセコ町、千歳市、恵庭市にもまたがっている。

地図測量関連では、北海道の地図測量の歴史を調べ、全道各地にある三角測量時代の基準点である天測点と子午線標、特色ある一等三角点の現況、新田次郎の小説「劔岳 点の記」の主人公でもある陸地測量部の測量官、柴崎芳太郎の北海道での測量実績地の現況も取りまとめた。

120部発行して若干残部があり、1部1500円（送料別）で頒布することになるので、購入希望者は神原さんまでご連絡いただきたい。



4編から構成され、A4判、全135頁。

三角点関連では、登別から手が届きやすい胆振地方周辺の山岳地にある三角点を綿密に調べ、探訪ルートと三角点の現況を一覧化した。調べた三角点は、胆振管内の登別市、室蘭市、白老町、伊達市、壮瞥町、洞爺湖町、苫小牧市、豊浦町

神奈川支部が会員の総力を結集した労作『かながわ山岳誌』刊行

日本山岳会神奈川支部が2016年の設立以来、記念事業として取り組んできた書籍『かながわ山岳誌』が今年2月に出版された。同支部が会員の総力を結集して県内のほぼすべてのピークや主要な峠を踏査し、87のコースを設定してその踏査記録と文化情報を掲載。加えて地質、気象、植物、動物、山岳信仰、山名・峠名の由来の各分野について、それぞれの識者が執筆し、神奈川の山の特徴や魅力を総合的に俯瞰できる書である。

5月に全国支部懇談会を主催する神奈川支部が6年の歳月をかけて完成させたこの労作、新妻徹会員から寄贈されて白石ルーム図書室に1冊所蔵されているが、

Amazonと楽天ブックスでも購入でき、書店でも取り寄せ可能。

かながわ山岳誌  
県内のほぼすべての山の  
踏査記録と学術・文化情報

日本山岳会神奈川支部編著  
A5判 304p 2,200円

